

---

# その背に黒の羽根を

Nerine

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

その背に黒の羽根を

### 【Nコード】

N1238Y

### 【作者名】

Nerine

### 【あらすじ】

捻くれ少女は全てを捨てて、一人世界を渡った。待ち受けるのは、惨劇と憎悪。行き着く先は、償いを強要する地獄。悪魔な天使は、救う為に血で染まる。理由はただ、気に入らないから。（異世界トリップファンタジー）

別サイト様にて投稿させてもらっていたものです。

しかし、大分書き加えていきますので、以前の場面まで追いつくま

でに暫くかかるかと。当然、これから読んで頂ける方でも話が分からないという事は無いので、よければどうぞお付き合い下さい。

## プロローグ

物語りによくある、主人公が突然異世界に行っちゃう所謂トリップ。

そこでは大抵、何か主人公に役割とか秘めたる力があって、仲間に出会って物語が進んでく。

そして最終的には、役目を終えてめでたしめでたしとか、誰かと愛し合っつてめでたしめでたしとか、元の世界に戻れてめでたしめでたしとか。

とにかく、その主人公は状況も分からずに強制的に巻き込まれて、でも、徐々に覚悟を決めて冒険をしていく。

最初は疑われたとしても、結局は聖女とか救世主とか謡われて。

まあ、王道だよな。

私も好きだよ、そういう話。

ただ、現実に自分に起こるなら絶対にごめんだ。

だって、あまりに贅沢じゃないか。

争いの中でも自分の手はあまり汚れず、贅沢だ。

そもそも、自分の世界に関係が無いなら、私にしか出来なくてもお断りだね。

だって、訳も分からず突然呼ばれて勇者になつてくださいますか？  
言われても、今までの生活全てを奪った相手にいいですよって言える？  
どっただけお人よし、いや、馬鹿だよと。

だから私は、例えそれで世界が滅んで、自分が巻き込まれたとしても絶対に頷かないね。

そう、私はそういう人間だ。

俗に言う、可愛気の無い女。

まあ、私の場合それ以上のレベルだけど。

兎に角、何が言いたいのかというと、王道じゃなくて良かったってことと、楽しみだってこと。

なつてやるうじやん、世界に追われる破壊者つてやつに。  
何も知らない奴らを嘲笑いながら、ただ自分の為だけに。

残念ながら、正義感とか使命感とか、そんな大それたモノは持ってないんでね。

私は私の為に私を捨てよう  
後ろ指を指され

石を投げられ

刃を突きつけられても

共犯者には償いを求め

他人には嘲笑いを与えて

私の手は赤く

背には醜い黒の羽根が

捨てるは己

手に入れるは、全てだ

つまらないのは、満たされているからだ

今日もまた平凡な1日が終わる。

周りがざわめきながらこの後のことを相談し合ったり、ただ笑い合ったりしている中、1人ごちて鞆を手に教室を出る少女が居た。

名を、河内紗那<sup>かわうちさな</sup>という少女は、いつも通りファミレスのバイトに励んで、21時には上がり22時には家に帰り着く。

日本人である紗那は、腰まで長くはあるが黒髪に黒い瞳、平凡な顔をしていて、一般レベルの高校の2年生として学校に通う、本当に普通の少女であった。

ただし、少しばかり複雑な家庭で、尚且つ少し独特な性格と体質を持っているが。

バイトで疲れた身体を引きずりながら暗い家へと辿り着くと、紗那を迎えたのはリビングのテーブルの上に無造作に置かれたお金だった。

「律儀なのか、なんなんだか。わざわざ預け入れなきゃいけないこ  
ちの身にもなってほしいわ。」

というか、こんなにあっても困るんだけど。そう言いながらそのお

金を手に取った紗那は、暫く黙ってそれを見ていた。

彼女は父親と母親、そして自分の3人家族であった。

過去形であるのは、当の昔にその両親は家に寄り付かなくなり、今やその繋がりは金銭面だけだといえるからだ。

しかし、それを悲しいとか寂しいとか思わないのが、紗那という少女である。

本人はそれで良いと思っているし、むしろそう思うのがダメなのだろうかと疑問に思っている程。

つまらない奴、可愛げのない奴、可哀想な奴、寂しい奴。

紗那と関りを持った人は、決まってそう言う。

彼女にも少なからず友達はいて、関係を持った異性だっていた。しかし、現在それは全て思い出であり、他人になってはいるが。

「お風呂、入ろう。」

高校生が持つには聊か多すぎる金額を財布へと閉まった紗那は、荷物を無造作に近くのソファアへと置いて風呂場へと向かった。

そうして脱衣所へと辿り着いた紗那は、制服を乱雑に洗濯機の上へと放りながら考え事をする。

子供の頃はそれなりに愛嬌のある普通の子ではあったが、今ではあまり表情が出ない。年々、両親の仲が険悪になっていくのと同時に真逆に成長していったのだ。

しかし、それが関係していたのは明白だったが、本人曰く原因では

無いという。やっと素でいられるようになった、というのだ。

色々な人に聞き飽きるほど捻くれてると表される子ではあったが、紗那はそんな自分が嫌いではない。

ただ、最近何度も思い出すのが、高校生に上がる少し前、近くの公園で出会った人物。その人だけが、紗那を優しい子だと言っていた。

『君は、優しさというものをちゃんと分かっているんだね。』

そう言っつて、無駄に整った顔で笑っていた。

ほんの数日前まで忘れていた記憶だというのに、何故かここ最近、その人物の記憶ばかりが紗那を占める。

全裸になり、シャワーを浴びて1日の汚れを落として、その間に溜めていた湯船に身体を沈めながら、紗那はうーんと唸った。

「確か、この世界を好きかと聞かれて……。」

本人にとって、この行動は無意識であった。

気付けば何故か、記憶を掘り起こして唸る毎日。

まるで何かの前兆のようだ、と感じている。

「色々話した最後に、何だっけ。んー？」

チャポンっと目の前の水を無意味に掬いながら、さらにその人物の会話を思い出そうと頭を捻る。しかし、一番重要な部分を思い出せずにいた。

仕方なく、その人物の姿からおさらいしていこうと、掬った水を落として鼻の下まで身体を落とした。

ブロンドの肩までかかる綺麗な長髪に、透き通るようなブルーの瞳。正確な身長は知らないけれど、細身の身体付きが印象的だった。ただ、そこらの俳優よりも格好良い容姿のくせして、口調がなよなよしているのが紗那には勘に触って苛々した覚えがある。

「ひっさしぶりくん。いつやあ、見違える程に育っちゃって、まあ！」

紗那は思考の海に沈みすぎていて気付いていなかった。

ただ1人であったはずの風呂場で、自分以外の声が響いたことに。

「それで、君ならとか何とか言われて、確か最後に」

「もし僕に限界が来たら、力を貸してくれるかい。」

喉元まで出かかっていた答えが突然他者により告げられはつとした。

そうだ、そう言われたんだと瞠目する。だけど、深入りすれば後戻り出来なくなる気がして、追求しなかつたんだと当時の心境も思い出した。

「今でも、この世界は好きかい？」

何故ならあの時も、こんな風に寂しく笑っていたから。

と、そこでやっと、紗那は自分の思考の可笑しなところに気付いた。

はたと目を瞬き、ゆっくりと横に視線を向ける。

「やつほぐ。やっと気付いたあ？」

「は？………はあ？！」

驚きに思わず立ち上がり、口をぱくぱくさせて言葉にならない声を上げながら指を差したその先には、今の今まで紗那の頭を占領していた人物と寸分違わない男が居た。

ただし、浴槽の縁に顎を寄せ、明らかに鼻の下を伸ばして沙那の身体を上から下まで隅々観察していたが。

「女の子の成長は著しいねえ。」

「っ！？こんの、変態！！！！！」

そして、男が発した言葉に自分の姿を思い出し顔を真っ赤に染める。次には叫びながら、素晴らしいフォームで繰り出された右ストレートが、男の顔面へと炸裂した。

「うぼうふっ！」

嫌らしい視線に思わず出た手がしっかりと現実だと教え、でも羞恥が大きすぎたからか、沙那は混乱していてしっかりとした思考が来ない。

「ああ！お風呂に鼻血が！」

風呂場には、紗那のズレた悲鳴が響き渡った。



## 再会は崩壊への幕開け

「なんであんたがここに居るの?! しかも、風呂場!」

「いや、良いパンチだったなあ。でも普通、あそこは平手でしよう。」

リビングには、かなりの温度差のある2人による会話が繰り広げられていた。

その後、紗那は男が気絶している間に慌てて風呂場から脱出し、服を着てリビングに避難をした。しかし、そこには気絶していたはずの男が暢気に寛いでいる姿があったのだ。

確かに手加減無しで顔面と真ん中を殴りつけた筈なのに、その顔には傷が全く無かった。

「とにかく答える!」

只でさえ状況が掴めないというのに、男ののらりくらりとした調子に会話は儘ならず、紗那は苛立ちで普段では有り得ない大声を上げる。

しかし、男はゆったりと笑ってソファに座っているだけで答えよう

とはしない。

このままじゃ埒が明かないと、紗那は深い溜め息を吐いた。

「…はあ、もう良い、分かった。取りあえず家から出て行け。」

玄関を指差しながら、心の中では警察を呼ばれないだけマシだと思えと悪態をつく。しかし、返ってきたのは予想外の言葉だった。

「呼ばないのは面倒くさいからでっしょ？嘘は駄目だよん、嘘は。」

「だって、被害届けとかなんだとか…え、いや、そうじゃなくて！あんだ、今……？」

ソファの背の上に肘を置き、仁王立ちしている紗那に身体を向けて男が言った言葉は、確かに正解だった。紗那は、情け以前に手続きが面倒くさい理由で通報をしたくないと思っていた。しかし、それを言葉にしていない。

出会った当時も、男に対して胡散臭さを抱いていたが、今はそれ以上で可笑しいとやっと気付いた。

驚愕とも恐れとも取れる表情で震える唇からは、何も言うことが出来ない。

変な話ではあるが、紗那のとある理由で絶対の自信が持てる危機察知能力ともいえるもので男に警戒はしていない。

しかし、紗那の家は高級といってもおかしく無いマンションの為、セキュリティがかなりしっかりしている。まず不法侵入出来ない

造りであり、しかも戸締りもしっかりしていて、さらには風呂場にどうやって入ってきたのだろうか。

家そのもの自体に入れたとしても、風呂場に入ってこられたらさすがに思考の海に沈んでいてもまず気付くだろう。なのに、音すら聞いた覚えがなかった。

そんな紗那の戸惑いが分かったのか、男はしてやったりと晒った。そして、自身の隣をぼんぼんと叩いて座るように促す。

戸惑った末、紗那は男から離れてソファぎりぎりの位置にゆっくりと腰を下ろした。

「……何の用？」

暫く、落ち着く為にか唇を浅く噛み視線をさ迷わせ、こめかみをとんとんと叩いた紗那は、ぼつりと睨み付けながら男に言った。

今度は、逆に男が瞠目する番だった。紗那にしてみれば、当然の問い。危険が無いと判断した上で男がこの場にいるのは、どう考えても自分に何かしら用件があるからだと考えたのだ。しかし、男からしてみれば、簡単にそこに辿り着けるその精神が不思議である。

「君は、変わる所か更に強くなったみたいだね。嬉しいけど、残念だよ。」

そして、どこか悲愴を漂わせる表情で、のらりくらりな喋り方ではないものでそう言った。それが、紗那には意味深な言葉に感じられ、再び混乱を抱かせる。

その姿は、出会ったあの時と同じであった。

変わったのは、自分の身体が縦に成長したぐらいである。

悔しいかな、男は著しい成長と言ったけれど、紗那の体型は年齢にしては凹凸が少ない。いや、少なすぎる。

自覚している身にとって、気にしていないとは言ってもコンプレックスに感じてはいたことであつた。

だが、目の前の男は記憶と何もかもが同じであつた。見た感じ20代後半に思えるので、2年以上経っていても成長は止まっていて当然かもしれないが、服装すらだ。

尚更胡散臭さが増した。そんな事を思われているというのに、男は気にした様子もなく、黙って紗那に視線を向けている。

しかし、男は徐にソファの前のガラステーブルの上にあつたテレビのリモコンを手に取り、えらくゆったりとした仕草でその電源を入れた。

すると、当然部屋にはテレビからの音声が響いていく。

わざとらしくゆっくりと、数字の通りにチャンネルを変えていく画面を、紗那は怒ることなく見つめた。

『次は、世界中で多発する自然災害についてのニュースです。』

と、男の手が一つのニュース番組で止まる。

途端訝しげに眉を顰める紗那だが、男はまだ何も言わない。

『アメリカでの竜巻、オーストラリアでの山火事等に続き、昨日中国で大きな地震が発生しました。幸い、日本への津波の心配はありませんが - - 』

それは、最近不自然な程頻繁に発生する災害についてのもので、現在世界中で最も注目されている話題についてだった。

専門家の中では、地球滅亡の危機だなんだと騒いでいるらしい。

しかし、だから何だというのだろう。

何か用があるのかと言って、答えのないままにこれを見せられるが、まさかこんなものが関係するとは思えない。

しかし、心の中でそう思い至った直後、だから何だという憤りを込めて男を見れば、バツが悪そうに眉を下げて苦笑していた。

「えへっ！察しが良いねえ。」

「……はあ。」

男に常識は通じないんだろうと薄々思っではいたが、だからどうしろと言うのだ。自分はただの女子高生であり、男が会いに来たのはこのニュースが関係していたとしても、出来る事は何も無い。

しかし、男が何事もなく去るなんて考えられず、紗那は深く深く溜め息を吐いて目の前に手を翳し、待ったをかけて立ち上がった。

「え、聞いてくれるの？つて、ちょっとく、何処行くのくう？」

「コーヒー淹れるの。」

頭を抱え、ふらふらとした足取りでキッチンへと向かう。

背中では男が何かを言っているが、兎に角今は落ち着ける何か欲しいと紗那は思った。結果、大好きなコーヒーを淹れることにした

のだ。

インスタントコーヒーを用意して、常備しているポットでお湯を注ぐ。かなりのコーヒー好きである紗那は、豆から挽いて淹れることの方が多いのだが、今日ばかりはその元気が無いらしい。

立ち上る湯気からは、いつものには劣るが、それでも良い香りがある。

「わゝ、僕のぶ」

「で、私に何をさせたいの。」

手に持つカップは当然1つ。それが分かっているながら催促してくる男を無視して再び座り直した紗那は、一刀両断そう問うた。

「聞いたらもう、後には引けないよ？」

その瞬間、男からも紗那からも、いい加減な雰囲気は消え去る。真剣な顔で聞き返してきた男に、紗那は笑った。

「でも、あなたにはもう私しかないんだろ？」

この時にはもう、紗那の心は決まっていたと言っても間違いではないだろう。

彼女は、得度も名も知れない変態の為、全てを守ろうとして破滅に導いた、弱くて怖がりな男の為に悪になる道を選んだ。

出会った時とは違い、男が浮かべる笑顔が苦しみからだと言えな

い程、紗那は餓鬼ではなかった。

「君は、異世界というものは存在すると思うかい？」

紗那の言葉に目を見開いた男は暫く固まり、目元をふつと和らげた。そして、そう言う。

「そりやまた、いきなりだね。でもまあ、別にあっても不思議じゃないでしょ。」

今度は紗那が思案し、自信なさげに答えた。当然だろう、異世界とは本の中のファンタジーだ。こんな真面目な場面で出てくる言葉とは思えない。

でも、紗那は馬鹿にするでもなく、考えて答えを返した。

世の中は自分が見たものだけが全てではないんだと、教えられるまでもなく知っているのだ。

狭い世界に浸っていれば、狭く感じて当然だ。だけど、紗那にとって自分の世界は狭くとも、それに浸ってる気は無いので世の中は広い。

何故なら、好きなもので溢れているから。

たとえ、愛は知らなくとも好きで溢れている。

「ははっ、とにかくこれ読んで。その間に、僕はお風呂で寛いどくから。」

「待て待て待て。大事なことに手を抜くな。」

好きなものを思い浮かべ、自然と微笑む紗那に男は目を細める。そ

して、彼女の出した答えが嬉しいのか、小さく笑い声を上げた。

しかし、あるうことか男は、異世界があると言った次にはA4サイズの3枚の紙を紗那に手渡して立ち上がる。

慌ててあげたつつこみも無視して、勝手知ったる他人の家よろしく颯爽と風呂場へと行ってしまった。

「……はあ。まあ、良いや。」

怒っても無駄だと悟った紗那は、ふうつと息を吐いて頭を抱え、少しばかりぼーっとした。でも、それは本当に僅かの間で、よしっと小さく声を出して気合を入れて立ち上がり、新しくコーヒーを入れ直して放置してあった学生鞆から適当なノートとペンを取り出す。

そして、先ほど渡された紙とそれらを持ち、ダイニングテーブルに移動した彼女は、溢れる疑問や要点を素早く纏められる用に手にペンを持って、クルクル回しながらとうとう紙を読み始めようとした。

しかし、いきなりだんつと全力で机を叩き、どすどすと足を踏み鳴らしながらかなりの速さである場所へと向かった。

ばたんつと壊れるぐらいの勢いでドアを開けば、そこにいたのは見覚えの無いアヒルの玩具で遊びながら湯船で寛ぐ男。

「読んで欲しかったら、耳障りな鼻歌を止めろ！集中できないから……！」

「きゃあ~~~~！変態っ……！」

「ソレ、千切るよ？」

「じめんなさい。」

繰り返されたのは、なんていう漫才とつつこみたくなるようなやり取り。

冗談の通じない紗那の鬼の形相に恐れを為したのか、男が全力で謝れば、次は無いと静かに言って扉は閉められた。

どうしてか、見られた男の方が顔を赤らめて悶えていたのは余談としておこう。

悪魔が笑えば、

『愛しの紗那ちゃんへ』

始まりは、なんとも脱力する言葉で書かれていた。

しかし、量はA4サイズの紙に機械的な言葉でびっしりと、そして内容は紗那が想像していた以上に複雑でシリアスなものだった。

こんなものを口じゃなく、文面で伝えてくれたことに紗那は思わず安堵する。

「頭、パンクしそう。」

気付けば、当に日付が変わっていた。

あまりの衝撃に立つこともできず、肘を立てて頭を抱える。

だけど、意外にも疑問や質問はあまりなく、横のノートはほとんど空欄だった。

書かれていた内容は、今現在の状況とこのままでいけば辿ってしまう結果。そんな情報ばかりだったのだ。

「問題なのは、私にどうして欲しいかだね。」

とはいっても、だいたいの予想はついている。文面からは、準備をさせようとしているのが見て取れていた。

「とにかく、まずは頭を整理させなきゃ。」

だからといって、動揺や混乱をしないわけではなく、むしろスケールが大きすぎてキャパシティーオーバーであつたりはするが。

紗那は、男が未だ戻ってこないのは、まるでこちらを窺っているようだと感じながらも、自分なりに紙の内容を纏めることにした。

男の言っていた異世界は「アピス」という名で、そこは地球と似たサイクルを持つ存在らしい。ただアピスでは、地球には無い所謂魔法が存在し、人々の生活の要となっている。さらに、地球が自然サイクルを基盤としているように、アピスでは精霊という存在と量が基盤になっていた。

魔法はその精霊の力を借りることによって使え、それぞれの属性を持つ。火や水といった、地球で伝説・伝承とされる精霊のイメージで良いと言える。

渡された紙には、そのアピスについてと、そこに築かれている国の大まかな世界情勢等が延々と書き連ねられていた。

「めちゃくちゃファンタジーじゃん。あれだね、妄想力を侮ってたわ。」

ただ、紗那にしてみれば、これだけであればそんなのもあるんだな、

程度で終わっていただろう。重要なのは、そこから先である。

そのアピスでは今、精霊がどんどんと数を減らして危機的状況に陥っているらしい。原因は単純明確、人間の争いにより大地が血に染まったからだ。

精霊は穢れに滅法弱く、どこの世界でも、人間は欲に溺れて争いを生み出すのだろう。そのせいでバランスが崩れ、世界が崩壊するレベルにまで陥った。

しかし、ここまできても、紗那にしてみれば他人事である。いや、地球からすれば他世界事だ。

ただそれは、地球とアピスが一心同体な関係でなければ、だが。男というか文面曰く、アピスが消えれば地球も消える。

それが、あの謎に多発していた自然災害の原因であった。

こんな事信じる奴の方が神経を疑われる。いくら異世界があっても不思議はないとは思っても、だからといって、一心同体な世界が滅亡しかけてるせいで地球も危なくなってますよと言われて信じられるか。答えは否だ。

だけど、紗那には男がこんなスケールのでかい嘘を言っただけをどうしたいのか見当はつかないし、そもそも男自体に説明できない行動をされている。

「読んでくれた？」

取りあえず、文面の情報に整理が出来た頃、見計らったかのように男は戻って来た。

人の気も知らずに暢気に冷蔵庫のミネラルウォーターをがぶ飲みする姿に、紗那はこれでもかというぐらいに殺意を覚えるが、そこはぐっと我慢をした。

「んで、私は何をすればいいの？」

代わりに、紙の上から机をコンコンと指で叩き説明を求める。

「いいの？君のことだから、大体的見当はついたんでしょ？」

「見当は、ね。でも、具体的な事は全然。だから、結論はだせないし、そもそもあんたの考えが分からない。」

分かっているのは、どういった理由にしる男が自分を選んだということだけだった。だからこそ、紗那には話を聞く権利がある。

その上で決定を下していくのだ。何を選び、どう覚悟をするのか。

仮にこれが下手な冗談であれば、紗那は男の綺麗な顔を原型を留めないぐらい殴ってやろうと決めていた。部分的に嘘が含まれているならばそれ次第で、地球が関係あるのかどうかという一番重要な部分が万一嘘であったなら、生きるのが嫌になるぐらい痛めつけて殺してやろう、とも。

「うっわ、やりかねないねえ。」

気配を察したのか、はたまた心を読んだのか。男はひきつった顔でそう言った。そして、紗那の向かい側に腰を下ろす。

「さて、結論からいうとね？」

「タンマ。その前に、ひとつ。」

肘について手を合わせ、顎の下へともっていった姿は異様な程絵になり、男の瞳からは今までにないぐらい素晴らしく真剣さが溢れていた。

しかし残念なことに、そう、凄く残念なことに、だ。

紗那は大きく溜め息を吐いて、その倍息を吸い込んだ。

頭の中で、こいつのシリアススイッチは何処ですかと、誰に問うでもない質問をしながら。

そして、腹に力を込めて叫ぶ。

「いい加減、服を着ろっ！……！」

「うへ？あゝ、忘れてたあ。」

へらへら笑いながら自分を見た男は、腰にタオルを巻いただけの姿だった。

「ああもう、ここが家なのに無性に帰りたい。」

紗那が思わず零した愚痴には、同情を禁じ得ない。

「さてと、こつからは真面目にいこうかなあゝ。」

だけど男は対してダメージを受けず、紗那が不憫に思える。しかし、本人は気付いてはいないが、自分でも自覚しているはずの無表情っ

ぷりが、男の前では普通の少女と変わらないものになっていた。

男はサツと片手を軽く払う動作をした。すると、ほぼ裸であったのが一瞬で服を纏う。すつと細まった視線に、紗那も自然と同じものになる。

男もどうやらふざけた”フリ”を止めたらしい。

それが分からないほど紗那は無頓着では無いし、元々人を信用しない性格でもある。

「まずは質問、あるかな？」

「世界の仕組みとか情勢に疑問を持ったところで、どうでもいいし何の意味もない。質問は、全部聞き終わってからじゃないと意味がなさそうなのだけだし、後でいいよ。」

その答えに満足そうに男が頷いた次の瞬間、世界は一変した。

見慣れた部屋も、今の今まで座っていたテーブルも、飲みかけで冷めてしまったコーヒーマも。何もかも、全てが。

目が痛くなるほどに真っ白で窓も扉も一つも無い、まるで延々と続く空間の様な部屋へ。部屋だと思えたのは、男が斜めに身体を倒した、寄りかかる体勢をしていたからだ。

「確か一度も、名乗っていなかったね。」

男の服装も変わっていた。黒いズボンに白いシャツという格好だったのが、

今では頭に月桂樹の冠をし、物語に出てくる神官のような真っ白い

一枚の布のような服。その姿で、男は微笑んだ。

紗那にとって吐き気しか感じない、何もかも優しく包みこむような慈愛の満ちたソレ。

「私は君達人間に、神と呼ばれる存在だ。君は、選ばれた。」

交差した視線の中で、紗那は内から溢れだしてくる感情に吞まれていった。

止めどなく、大量に溢れてくる感情。

気持ち悪い。

きもちわるい。

キモチワルイ。

気付けば拳を力の限り握り占め、激しい嫌悪をそのまま視線に宿す。

「分かった、帰る。今すぐ、ここから、家に、帰してっ!!」

怖気づいて出た言葉では無い。腹が立ったからだった。

それはもう、身体が震えるぐらいの怒り。

しかし、紗那がどれだけ激しく睨み付けても、自称神様は微笑んだままだった。

「どうして?」

身長之差で見下ろされた視線は慈愛に満ち、綺麗なバランスの良い

血色の通った口を少しばかり動かして、そんな質問をしながら。

神様は、紗那を試そうとした。

「そんな下らない質問をして馬鹿な真似をするのなら、私は帰る。」

「君じゃなきゃ救えなくても、かい？」

それに対し、紗那は鼻で笑った。

私に責任は無い、もしそうなら選んだカミサマが悪いのだとのたまう。

紗那は偽善者でも、優しさに満ち溢れる人間でも無かった。

でも、誰がそれを責められようか。

いくら自分のせいで人が死ぬかもしれない、見捨てる気かと詰め寄られたところで、はつきり言って関係無いのだ。しかも、目の前でそれを見せ付けられるならまだしも、知らない場所で知らない人間が。

自覚も、現実身も、問題の重要性を感じることも、平和な日本で暮らす少女にそれを求める事自体間違っているといえよう。

しかも、お人よしの性格であったならまだしも、紗那はそれとは程遠い、寧ろ悪いと言われる回数の方が多し性格をしている。

「もう一度言う。こんな真似をして私を試すのなら、帰せ。」

試されるのは何より嫌いで、見下されることにも腹が立つ。

しかし、今にも殴りかからんばかりの怒りを抱えている紗那に、カミサマは更なる追い討ちをかけた。

「じゃあ質問を変えよう。ここに来た時点で拒否権がなければ、どうする?」

瞬間、紗那の目が零れんばかりに大きく開かれた。

我慢の苦手な彼女にとって、今が限界である。これ以上の”戯言”を聞かされればきつと、神様であるうが関係なく拳が飛ぶだろう。

「たとえそうでも、結局動くのは私だ。拒否しても強制されたなら、たとえ世界が滅ぼうと、自分が巻き込まれようと、私は動かない。絶対に!」

そして、鼻で笑ってやるんだ。私を選んだお前に、ざまーみろと。

紗那はそう言って、怯むことなく笑った。

それは平凡な女子高生がする顔では到底なく、まるで悪魔のように妖艶で歪んだ姿であった。



「さあ、捻くれな私は何を選ぼうか」

「くっ、あはははは！いや、やっぱり最高だよ！」

剣呑とした雰囲気は、カミサマの発した大きな笑い声に消失した。それこそ大口を開け、笑いすぎて咳き込んだり引き笑いになったり、しまいには床を叩いて悶絶する始末。

結局、カミサマはしつかりと紗那を試し、そして見事に合格をした。してやられた紗那は当然怒り、未だに笑い転げるカミサマにつかつかと歩み寄る。

「っち、逃げんじゃねえよ。」

「いや、ほんと、ごめんって〜！」

繰り返した拳は、寸前で危険を察知したカミサマに避けられて空を切る。慌てて弁解を始めるも、紗那の怒りは収まらなかった。

「でも、仕方無いじゃないか。これは僕というより君の為。君が生き残れる可能性を図る為のものだったん――痛いつ！」

「一発逃げたからって油断するな。」

追撃が見事、カミサマの右頬に命中する。だが、風呂場でのものに比べればその威力は可愛いものだ。

2人の間にはいつの間にかテーブルとイスが現れていて、カミサマは殴られた部分を擦って容赦がないな」と文句を言いながらも座るように促す。

白いこの部屋では当然それも白であり、どういう原理か影が見えなければ視覚では捉えることが出来なかつただろう。促されるままに座った紗那は、何故自分の影は無いのか疑問をもって頭を捻りながらも、目の前に腰を下ろしたカミサマへと視線を移した。

そこにはもう気持悪い微笑みを携えた者はおらず、代わりに申し訳なさ満点の苦笑が浮かんでいた。

紗那は聞き零してなどいない。カミサマは確かに、生き残れる可能性を図る為と言っていた。それは逆に、これからの選択の先には死が伴い、さらに危険性が高いということだ。

その真意を今、カミサマは告げようとしている。

しかし、それだけではまだ足りない」と紗那は呟く。

決断に必要な情報がなさすぎる、と。

だからだろう、紗那は先ほどとはまた違う挑戦的な笑みをカミサマに向けた。

「僕は、崩れ始めたのをただ見てたわけじゃない。なんとか抑えようと、今まで全力を尽くしてきた。」

カミサマはぽつりぽつりと、本当に悔しそうに言葉を落としていく。それを、紗那は無表情で聞いていた。

「でも、限界だった。残る手はもう、一つしかない。」

「最後の手段で、あんたが一番避けていたものだね？」

それを言うと、カミサマは頭を押さえて頂垂れる。それでも紗那は微動だにせず、淡々と思った事を口にした。

隙間だらけの作りかけのジグソーパズルにピースがどんどんとはまっつていく感じで、穴だらけの予想が埋まっていった。

それに対しカミサマは、君は本当に聡明だねと呟いた。しかし、その顔はどこか残念そうで、褒めているとは思えない。

そういった態度は、紗那にとって苛立ちしか生まなかった。

「君にだけはさせたくなかった。君は僕の一番のお気に入りで、好きな子だから。でも、君以上に相応しい人間が見つからなかったんだ。」

ただ、この言葉だけは、紗那にも込められた気持ちから分らない。その好きはラブなのかライクなのか、ラブだとしても、それは異性に対するものか、はたまた子供に対するものなのか。

もしラブだとしても、紗那にとってその感情はどうでもいいことであるので、結果意味のないものになってしまうが。

ただ不思議と、なんとなくだが異性に対するラブだと感じる。

しかし、聞いたとしても答えが返ってくることはないだろう。

「僕にとって、2つの世界は全てなんだ。」

「そして世界も、あんたが全て。」

先程の言葉に紗那は結局反応を示さず、話は確信へと迫っていくように思えた。

紗那は自然と、そういう答えを導き出している。

自分達は、彼を殺すことで今を生きていられるんだろうと。

だけど、今まで聞き手に回っていた紗那は、ここに来て頼杖を付きつつカミサマに問いかける。

「ねえ、私に何をして欲しいの？」

あまりに冷静で冷めた問い。だが、紗那が知りたいのは、カミサマの気持ちや今までの苦労では無い。

何をして欲しくて、何をすべきで、どういった方法で、どんなリスクがあるかどうかだ。

隠すのも言い逃れも、誤魔化しも後回しも当然許しはしない。

それに、中途半端な態度が寧ろ、辿り着く最期を明らかにしてしまう。

「君に、世界を救って欲しい。」

カミサマはたじろぎながらうつ。

「どつやつて?」

しかし、間髪入れずの言葉に目が泳ぐ。それを見逃すような馬鹿はここにはおらず、カミサマは知らずぐつと拳を握った。

「アピスに全部で10ある精石を、残らず全て壊して欲しい。」

「それはどういったもので、どんな役割があつて、どれ程の価値があるものなの?」

また返つてきたのは、応否ではなく問いだった。一体、このような場面でこんな行動が出来る少女が地球とアピス合わせてもどれ程いるのだろうか。

どんな人生を歩み、どんな経験をし、どのような目で世間を見れば、ここまで冷静に物事を判断しようと思えるのか。

正直、人間味が薄いとを感じるが、しかし、カミサマは紗那がこういう少女だということを知っている上で選んだのだろう。それ自体には驚かず、寧ろ彼女のお陰でこの場が成り立っていると思つていかもしれない。

そして、カミサマはおずおずと、今の質問に答える為彼しか知らない歴史を語り始める。

だがそれは、紗那にとって実に下らなく愚かとしか評価出来ないものであった。

それは遙か昔に交わした契り。 始まりの詩。

人々がまだ固い石の上で寝起きし、命懸けで食を求め、本能で子孫を残していた時代。

そこは、精霊に満ち溢れていた。

人は精霊に感謝し、精霊は人を愛し、そうやって命は巡った。

そしてある時、それぞれの属性の中で最も力をもった精霊たちが、人間にある祈りを抱いた。愛を、形として与えた。

愛する命よ、その幸せが永劫であるよう、豊かさが心を満たし続けるよう、我等を捧げる。

精霊王とよばれるその精霊達は、代わりにとある約束を結ばせた。

我等の一部である精霊達を、決して穢れに染めてはならない。あれらは、我等であり世界そのもの。これを違えし時、全ては無に帰し、柱は崩れる。

そして10の精霊王は、10の精石へと姿を変え、約束通り人々に豊かさを与えた。

水は、枯れることのない癒やしを。

大地は、溢れる優しさを。

雷は、発達した技術を。

陽は、満ち溢れる勇気を。

海は、雄大な糧を。

空は、自由な翼を。

風は、屈しない心を。

星は、導きを。

そして光が希望を与え、闇が包容した。

次第に人々は国を築き、しかし徐々に豊かさに溺れた。

人は、たった一つの約束を違えたのだ。

そして今、終わりを迎えつつある。

契りを忘れ、それに気付くことなく、ただただ、欲に支配されながら。

それを彼等は嘆く。我等はただ、愛していただけだと……

「人間は約束を違えた。だからもう、精霊王が精石である理由は無

い。人間が豊かさを求める資格はもうないんだ。」

そう長くはない話を終え、カミサマは深く息を吐きながら静かに涙を落とした。

透き通るようなブルーの瞳から零れ出る透明な雫は、きらきらと輝きながら陶器のような滑らかな肌を伝い白いテーブルを音もなく叩く。

その姿は名画の様に美しく、しかし紗那の目には酷く滑稽で無様に映った。

何故なら、精霊王が豊かさを与えた理由は至極下らなく、そもそも求めることに資格など必要ないと思うのだ。

単純に、精霊王は過ちを犯しただけで、カミサマは分かっているだけ。ただだけ。

そう紗那には感じられ、呆れた感情しか浮かばない。

「下らない。だから何だっというのさ。あんた達はただ認めようと思っただけで、現実から目を背け続けた結果、後が無くなっただけじゃない。」

同情も労いも無く、紗那は当然の如く吐き捨てる。しかしそこで、カミサマが初めて感情を顕わにした。今の今までは、いかに紗那をその気にさせようかという思惑を感じる行動ばかりだったというのに、整った顔を怒りで赤く染めてテーブルを叩く。

「裏切ったのは、君達人間じゃないか！！人間のせいで、世界は危機に陥ってるんじゃないか！！それを下らないだと？僕がどれだけ必死だったか！」

それだけ努力し頑張ったということなのだろう。しかし、紗那にとつてみればそんな言い分通用しない。彼女はアピスの人間では無く、寧ろ地球の生物は全面的に被害者なのだ。仮に地球での温暖化、環境汚染、そういったものも世界を蝕んでいたとしても、今回に関しては無関係といって可笑しくないだろう。

だから、紗那にしてみれば自分の言葉が凶星で、恥ずかしくて、悔しくて、悲しくて、認めたくなくて。だから、みつともなく喚いている様にしか受け取れない。

それに、今必要なのは誰が悪いとか、誰の責任だとか、誰のせいだとかじゃないだろう。カミサマは、何一つ見ておらず、分かっているのではないのだ。

それでは気付けないし、認めなければ先へ進めるわけがない。

「だとしても、私には関係ないね。確かに人間が元凶だけど、きっかけを作ったのは精霊王で、それを黙認していたのならあんたも立派な共犯だ。」

なんて冷たい言葉を吐くんだ。何も知らない第三者であれば、紗那を責め立てたかもしれない。しかし、紗那に迫られている選択は、そんなことを気にしていられる次元ではない。今ここでカミサマを慰めたところで、世界は絶対に救えないのだ。そして、何も抱くことができない。

「私が、共犯？……ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな！！」

逆上したカミサマはさらに怒りを増し立ち上がり、避ける間もなく

無抵抗な紗那の胸倉を掴んだ。そして無理やり立ち上がらせ、テールに押さえつける。

衝撃で背中に痛みを感じ、紗那は顔を顰めた。

何も捨てれず、何も見ず、それでは何も背負えないというのに。

綺麗な顔は醜く歪み、自分を見下ろしてくる視線は射殺さんばかりに鋭い。だけど紗那は、変わらず冷めた目を向けるだけだった。

自分が間違っているとは思わない。たとえ殴られようと、それこそ殺されたとしても、今の言葉を撤回する気はないという強い意思が込められた目。

求めるのなら失う覚悟を、守るのなら奪う覚悟を。その覚悟が何も無いから喚くしかできないのだ。そう、赤ん坊のように。

しかし、紗那が相對しているのは、決して赤ん坊では無いのだ。

## 天使は微笑む

「いい加減にしろ！！失う覚悟も、奪う覚悟も、見捨てる覚悟も何にも無いあんたが、何かを求めるなんて烏滸がましいにも程があるんだよ！何が違っつていうんだ。今のあんたは、欲に溺れた人間と何も変わらないじゃないか！」

負けじと掴んだ胸倉を引き寄せ、唇が触れ合うぎりぎりの距離で吼える。

紗那が願うのは、起こった事実と行ないを認め、その上でやるべき事を決めるということだった。

後悔や懺悔を慰めるなんて後からいくらでもできる上、自分がやる必要は無い。

なのにだ。精神はどろっどろに甘く、足場はぐらつぐら。そんな相手と下らない堂々巡りを先ほどから繰り返し、結果時間だけが過ぎていく。

本人からしてみれば、怒り狂いたいのは自分の方だと憤慨したいくらいである。

身体を支えてくれているのは背中では足は空中で揺れ、しかも胸倉を

容赦なく掴まれているせいで感じる息苦しさからいい加減解放されたかった紗那は、全身でカミサマを突き飛ばした。突然の衝撃に対応できなかったのか、カミサマは覚束ない足取りで彼女から離れる。起き上がった紗那は、締められていた喉を擦り小さく咳をしながら、片手をテーブルに置いて体重をかけた。

カミサマは、更なる叱責がくるだろうと思っていた。数度咳をして呼吸が落ち着いたのか、鋭い視線が彼へと向く。

しかし、予想に反して掛けられた言葉は、優しく切なく響いたのだ。つた。

「大丈夫。私が染まるから。だからあなたの気持ちも、何を一番守りたいのかを教えて？残念だけど、全部を守るなんて無理なんだよ。過ぎたことは仕方がない。仕方がないから、学ぶんだ。学ばなきゃ、いけないんだよ。」

繰り返さない為に。だから、言つて？

囁かれた言葉は叱責よりも衝撃的で、カミサマはよろめきながら目を見開いた。

紗那には当然、心を読む術など無い。だからこそ言葉が必要で、言葉は力を持つ。

「僕は……でも、そうしたら君は……」

ああ、なんて馬鹿なヒトだ。なんて弱いヒトだ。

紗那は心で叫ぶ。自らは悟り、そしてついさっき気付いたというのに。

彼女は、とつくの昔にカミサマのせいで汚されていた。覚悟もせずにした行ないにより犯した罪から逃れるなど、到底許されないのだ。これだけは言いたくなかったと思いつながら、それでも言わずにいられないこの状況を作り出した目の前の人物に、心の底から溜め息が漏れた。

「この2年、私はあなたに振り回されてきた。奇麗事ばっか色々言つてたけどさ、あんたはちゃっかり私が使いものになるよう仕向けてたんだ。そうだろ？」

それはもう、車に牽かれそうになったり、頭上から物が落ちてきたりは紗那にとって日常茶飯事だった。それどころか凶悪犯に出くわしたり、強姦魔や強盗に襲われたりだってした。

体質だと諦めていたそのトラブルへの遭遇率は全部、今日からの為にこのカミサマが起こしてきたことだったのだろう。危険を察知し、回避し、対処できる経験を培わせるために。今までのやり取りでそう思い至り、カミサマが唇を噛み締めて反論しない姿から確信する。

「また、繰り返すの？そうやって中途半端なままで、今度は全てを失うつもりか？」

冗談じゃないと叫んだ姿は、相当な苦勞をしてきたのだと思わせた。好きだと言い、そのくせ都合の良い”神の試練”とやらを経験させるその行為を、ずるいと言わずなんとするか。自身は汚れず、ただ求める姿に何を見出せるというのか。

その考えはとてもお綺麗で、その姿勢はとても愛しい。

一見、誰もが大切で優しさの塊みたいなお綺麗な精神は、結局は自分の為でしかないというのに。

「あんたはただの、エゴイストだ。」

責める為でも諭す為でもなく、無意識に零れた言葉は聞き取るうとしても難しいぐらい小さいものだった。だけど、カミサマは心が読めるらしい。なので、しっかりと伝わってしまったかもしれない。しかし、紗那はそれで構わないと思った。

彼の行為は許せるものでは決して無い。ただ、ややこしいもので、それが必ず好き嫌いに直結するかといえはそうとは限らない。

「あれは、悪いと、思ってる。あんなことになるなんて、思ってたかったんだ。」

暫くの間、2人は静寂に支配された。しかし、若干青ざめた表情で呟くように零したカミサマの言葉でそれは壊される。

「分かってる。先に言っとくけど、責めたくてこの話を持ち出したんじゃないから。」

抜け出せない泥沼状態に思わず零した溜め息は、カミサマの肩を大げさに跳ねさせた。それを見た紗那は、自分まで泣きたくなる焦燥感に駆られる。

しまいには頭痛までしてくる始末で、テーブルにかけた体重はそのまま、こめかみを押さえる。

「許す許さないだったら、私はあんたを許さない。だけどさ、好き嫌いであら好きだよ？気付いた今でも。」

「……何で？」

カミサマにとって、その言葉は予想外だった。どうやったたらそんな考え方ができるのか、カミサマであるはずの自分にも理解が不能だ。だから問うた。何故、と。だけど、紗那からしてみれば理由など無いのだ。ただそう思うだけ。

「私は物事は頭で分析して捉えるけど、好き嫌いだけは感覚まかせなの。だから、理由なんてないよ。」

あれはこうだから好きとか、これはああだから嫌いとか、そうやってわざわざ理由を付けるのは紗那にとっても面倒くさくて無意味に思えた。

面倒くさがりで捻くれ者な自分にとって、なんか好きだな、なんか嫌いだなぐらいがらしくて楽で良い。

それは恐らく、したいからする、したくないからしないといった感情と同じだろう。

「あんたもさ、少しぐらい適当になっていいんじゃないの？全知全能じゃないんならさ。」

「ねえ、さっきから言ってることがどんどん分からなくなってきたるんだけど。」

カミサマのつつこみは当然だろう。紗那自身、自分が何を言いたいか良く分かっておらず、言葉が上手くまとまらないでいた。

だろうね、私も分かんないと正直に言えば、カミサマがおかしいくらいポカンとした顔になる。紗那は一生懸命なつもりだった。自分の出来る限りで、届けようとした結果であった。

んー、つまり何か言いたいのかっていうと。そう前置きして暫く色々考える。感情のままに話したお陰か、始めよりは大分まとまってきた感じがし、そしてああそうか、と自分で納得していた。

「結局私が言いたかったのは、あんたは人がカミサマにしたただけで、別にカミサマでいる必要は無いでしょってこと。カミサマだからこゝうでなきゃいけないとか、ああしなきゃいけないとか。あんたの中は、そんなプレッシャーや義務感で蝕まれているんじゃないの？だから、私の声が届かない。」

それを聞いた時のカミサマの顔は、本当に見物だっただろう。

ようやく紗那の言葉が届き気付いたのか、カミサマは水に打たれたように動かなくなった。そして徐々に驚愕の表情を浮かべ、それが後悔へと変わり、歡喜に震え、遂に揺れが止まる。

その百面相する姿は、止まっていた時が再び動き始めたかのようにだった。

「僕は、神じゃなくて、いいのか？」

絶るような震える声で問うたことは、本来紗那に答えられるようなものではないだろう。何せ、大人が赤ん坊に質問するのと変わらぬい上にととても重要なことで、たかが16年程度生きただけの少女に出せるものでもない。

しかし、紗那は柔らかく笑って簡単に言っただけ。

「なりたいのなら目指せばいいんじゃない？ だけど、あなたは元々地球とアピスの二つの世界が実体化しただけなんですよ？ なら、カミサマでなくていい。やりたいことを、したいようにすればいい。」

それは別に、あんたも生きているなら当然持っている権利なんだから。

根拠も何もないからっぽな言葉に思えるが、カミサマにとってそれは思いがけない救いだっただけ。

「そして決めて。あんたが最も守りたいものが何か。」

そうして紗那は、さらに屈託無く笑う。

その姿はとても愛らしく朗らかで、まるで天使のように温かいものだった。

天使は微笑む（後書き）

神様をカミサマと表現しているのはわざとです。

決めたのは、私

「ねえ、君は世界が好きかい？」

幾度もの険悪なムードを乗り越え、二人は苦笑した。

カミサマの目元は少し赤らんでいて、紗那は彼が近付いてきた際にそつと右側のそこを指で撫ぜる。

それで良い、と頷きながら。

残るピースはほんの僅かとなっていた。

「好きだよ、とても。」

だって、この世界には好きなものが溢れている。

紗那の境遇は、お世辞にも幸福だとは言えず、色々な闇を見てきていた。

それでも迷わずそう言える彼女の心は、捻くれているからといって汚れていると簡単に言っていていいものなのだろうか。

「なら、僕の願いを聞いて欲しい。」

紗那の手に擦り寄り自分の左手を重ね、目を閉じながらそうカミサマ……いや、世界は願った。

彼女は照れくさそうにはにかみつつも、頷かない。

そこは、強さと言っているいい気がする。

無条件に頷かない精神はお人好しではないが、だからといって冷たいとも思えない。しっかりと、現実と向き合っている姿そのものはなかるうか。

それに、紗那の中ではまだ最大の疑問が解決していなかった。

何故自分が選ばれたのかという、その理由が。

「精石を壊して、精霊王を目覚めさせればいいの？」

世界は目は閉じたまま頷く。頬と左手に伝わる温かさを、心の底から愛しいと感じながら。

「ただ、精石は人間にとって何よりも大事なものなんだ。だから君は、地球とアピス、2つの世界の救世主でありながら、悪にならなきゃいけない。アピス全土の人間が君を敵とみなし、そして敵として立ち塞がるだろう。」

それが最も重要な、知りたかった“理由”であった。

世界は、紗那の右手が震えるのを感じた。

恐怖に怯え、何故自分がと恨みを抱いたのかもしれない。

そっと、拒絶を覚悟して目を開ければ、少し下に落とした視線の先に、左手で口元を押さえ目を見開いて呆然とする少女が映った。

痛々しい姿だった。贖罪の念に溺れそうになる。

だけど、自分の言葉はどうやったって言い訳や取り繕いにしかならないだろう。ぐっと右手で拳を握り、震える唇をこじ開ける。

「断るのなら、今の、内っ！」

だが、全てを言い終わる前に握っていた手を振り払われ、どんっと突き飛ばされる。絶望感に打ちひしがれながら相手を見れば、口元の手はそのまま、もう一方は腹部を押さえていた。

若干前に身体を傾け、テーブルに寄りかかることで必死に立っているようだ。

さらに申し訳なさがこみ上げてくるが、言葉と温もりどちらも拒絶されたばかり。右手が空しく上がるだけで、喉は動いてくれなかった。

そんな時だ。紗那の肩が一際大きく震え、がばつと突然顔が上がる。

「っ、ぶはっ！あはははははは！」

白い空間に、盛大な爆笑が響き渡った。

当然、世界は状況が飲み込めずキョトンとするが、紗那は口元を押さえていた筈の手も下げ、どう見ても腹を抱えて笑っている。

しかも、世界の呆然と固まる姿までツボに嵌ったのか、指を差してひーひーと笑い、最終的には力尽きたのか蹲りながら床を叩いて咳き込んでいた。

世界にとっては紗那のその反応が予想外であるが、実は彼女にとっ

ては自分が選ばれた理由がそうだったのだ。

死の危険があるのは、十分理解できた。某国の白い屋敷を10回単身で襲撃するのと同じぐらいハイリスクであり、野良猫100匹の中に放り込まれる1匹の鼠という状況が分かりやすい例えだろう。

だけど、それで怖気づく人間性を、紗那は持ち合わせていなかった。

「いいねえ、その、救世主なのに悪の響き。めちゃくちゃワクワクするんだけど！これは確かに、私以上に相応しい奴はいないわ。」

未だ尾を引くのかクツクツと笑いながらも、紗那は嬉しそうにそう言う。

まさかのワクワク発言に啞然としてしまった世界は、何やら不穏な空気を感じてブルリと身体を震わせた。

「な、何？え、というか、ワクワクすんの？！普通はここで嫌いとかが怖いとか、え？え？」

混乱が最高潮に達して無駄にオロオロする世界を見つめながら、紗那が言った言葉。この時ばかりは、世界に心を読む余裕は無く、当然聴覚で拾うことも無理だっただろう。

「ご愁傷様。面白そうでも、一人で責任を負うつもりは無いからね？」

悪魔な顔と、天使の顔。果たして本当の紗那という少女はどちらなのだろうか。

「で、まだ答えを言って無いんだよね。聴きたいならまず、私の質

問に答えて欲しいんだけど？」

紗那の笑いが収まれば、今度は世界が相当な衝撃だったのか混乱してしまい、暫く会話がままならなかった。

でも、爆笑するのも仕方ないじゃないかと紗那は憤慨した。

なにせ、世界に選ばれた理由がよりにもよって捻くれているからだ。

これを笑わずにいられるか、というのが本人の心情である。

「何回か聞いたけどさ、あんたは一番何を守りたいの？人間、精霊、世界、それともその他？」

しかし、そんな和やかともいえる雰囲気はその言葉で欠片も残さず消え去った。今の質問が、どれだけ悪役台詞で残酷なものか本人は自覚している。

世界も心の内を理解したのか、絶句して答えを言えない。

流石に甘ちゃんな精神がすぐにどうにかなるとは考えていない紗那は、ニヤリと笑って無言で催促した。

この間にも、今までの散々な時間の間にも、彼女の好きなものは現在進行形で壊されている。彼女にとっては下らない理由で、しかも世界も違う奴等によって。

それは、男に犯されるぐらいに気持悪く、我慢ならないことだった。

「往生際が悪いね。あんたはさ、人に悪になれと言いながら、自分は善でいるつもり？」

気付いたのなら容赦しない、と紗那は目で語る。

傍から見たら始めからそんなことしていないと思うぐらいの冷たさではあるが、甘い言葉は誰でも吐ける。だけど、何度も繰り返すが、そんなことを言って許される次元の問題ではない。

「僕は……」

そもそも何故、紗那は世界を追い詰めてまで答えを先延ばしにし、諭すような言葉ばかり言っていたのか。それはとても単純で、しかし彼女にとっては一番重要なもの。

求めていたのは、唯一これから自分がしていくことを正当化できる共犯者であった。

恐らく、ただ救世主になれ、勇者になれと求めていたのなら、性格からして鯁膠も無く断っていただろう。その榮譽に、紗那は価値を見出せない。

「いや、君の言う通りだ。あれも大切、これも大切じゃ何も守れない。君はやっぱり、優しいね。」

嬉しそうに笑う世界に、胸が少しばかり痛んだ。彼は、何をもちてそう思うんだろうか。自分が優しいのならば、人類みんな優しいと言える。

自分の思惑も知らずにいる世界に苦笑を返すのが、紗那にとって精一杯であった。

「僕は、世界を守りたい。」

僅かながら葛藤を抱いている間に、世界は紗那の手に墮ちていた。これで彼女は、世界を救うという大義名分の下、破壊の限りを尽くせるだろう。

「なら、私は奪う覚悟を。」

迷いを捨て去るべく頭を小さく振り、紗那は自身の胸に手を当てて言った。

そして、ゆっくりと腕を動かして再び近付いて来ていた世界を指差す。

「あなたは、見届ける覚悟を。」

それに頷いた世界は、バサリと服を翻して目の前の人間を見下ろす。彼を見上げてくる瞳には、揺らがない不思議な力があつた。

「河内紗那に命じる。世界を、救え！」

「……仰せのままに？」

畏まった世界への正しい返答が分からず、語尾が上がって疑問形になつてしまつた紗那。一瞬の間の後にくすくすと笑い合つた姿は、どこにでもいる男女だつた。

しかし、恐らく紗那が辿り着く先は地獄で、世界を待ちつけるのは生き地獄だろう。それを悟つてるのは、紗那だけであつた。

特別な力も才能もない只の女子高生。ただ、世界が声を大にして言いたいことが一つ。本人は顔も併々凡々だと言うが、実際にはかな

り目鼻立ちがすつきりしていて整っている。残念ながら、女性的では無くかなり中性的で、美少年と美少女の境の不思議な位置ではあるが。

とにかくだ。争いの無い世界で過ごしてきた紗那にとって、武器となり得るのは捻くれた根性と冷静な頭のみだけだろう。でもそれが、最も誇るべき力でもあると世界は思っている。

「じゃあ、準備したいから一旦帰して？」

「ええ！？何でそんなに切り替えが早いのか？ていうか、あんまりこっちの世界のものを持っていけないんだけど。……いや、はい。拒否権は無いみたいですね。」

今だって、最大限今の状況を生かそうと頭を働かせ、半ば脅しを含めながら行動している。それが到底、平常な精神の人間であれば出来ないことだと、紗那は気付かない。

強かに、狡賢く、姑息に生き残る為であれば、彼女はどんな事でもするだろう。

「ね、ねえ。今更だけどさ、行ったら二度と地球には戻れないんだけど。」

大きな存在なくせに、たった一人の少女におどと恐る恐る聞いてくる情けない奴が共犯者だから、尚更気が抜けないはずだ。

「分かってるっつーの。そんなの本当に今更だわ。」

「そんな軽く……死ぬかもしれないんだよ!？」

纏わり付いてくる大きな荷物を足蹴にしつつ、紗那はまた笑う。変態と捻くれの相性は、どうやらあまり良くないらしい。でも、あの意味バランスは取れているのだろう。

まさしく悪役の笑いに見えるソレは、世界に毎回ダメージを与える。

「上等じゃん。そこでゴキブリのように凶太く生き残ってやるのが面白いんだよ。」

「うわ、まあ、だから君なんだろうね。」

勇ましい相棒を手に入れた世界は、諦めに似た笑みを返して徐に手を差し出した。意味が分からず頭を傾げた紗那だが、素直にその手に手を乗せれば、自然な動作で甲にキスをされる。

「あんまり時間もないし、1日しかあげられないよ？お別れも、ちやんとしておいで。」

小さいリップ音の後に告げられた言葉。世界が視線を合わせれば、期待してはいなかったが照れた顔があるわけでもなく、むしろきよとん目を瞬かせる紗那がいた。彼女は、そんなことが頭に全然なくて、不覚にも表情に出してしまったのだ。当然呆れられ、淡白すぎるのは美德じゃないよと叱られる。

それでも、別れを寂しいと思う理由がなかった。

「まあ、それはそれとして。はい、これ。」

「ん？」

降り注ぐ非難を含んだ視線から逃れるため、1枚の紙を押し付ける。それはノートを切り取ったもので、良く見ればびっしりと細かく色々なものが書かれている。紗那がリビングで書類を読んだ時に、こうなることを見越して準備していたものだった。

「うえええええ!!!こんなに!?!」

中身はすべて、世界に準備して欲しいもので埋め尽くされていて、しかし、如何せん量的にも内容的にも鬼すぎた。流し読みで一通り確認した世界は、あまりの無慈悲さに眩暈を覚える。

そして当然、全部は無理だと抗議をしたのだ。

「叫ぶな、喚くな。それでも最低限なんだから。あ、後、私の性別変えたりとか出来ない?」

「出来るわけないじゃんっ!言つとくけど、成長させるのも無理だから!」

世界からすれば当たり前前の反応だというのに、紗那は耳を塞いで心から使えねえ奴と毒を吐く。しかも舌打ち付きとくれば、シヨックに固まるのは無理もない。その間紗那はと言えば、さらにこれからのことを頭をフルに回して考えていた。一体、どれだけ準備を重ねる気なんだろうか。

「あ、後一つ。あつちで違和感の無い名前、男と女どっちも考えておいて。」

「え〜っ、もう一杯一杯なんですけど!!!」

「黙れ、やれ。適当にやったら知らないから。……まあ、その代わり、私もあんたの名前考えといてあげるから。」

文句を垂れまくる世界とそれを容赦なく退ける紗那。やっと泥沼状態から抜け出したというのに、2人は騒がしく会話を続けていた。そして、紗那は地球での最後の1日を迎える。寝る暇が無いと気付くのは、家に戻ってコーヒーを用意し終わった時であった。

こうして、漆黒の羽根を生やした邪悪な天使は誕生した。

行うのは、平穩の破壊。しかし、今はまだ、それを知る者は誰も居ない。

……幸せとは無縁の旅を語る物語が始まった。



最大の罪、それは君を愛したこと。

「ああああー！勿体無い！」

夢見たいな一夜が明け、睡眠を切実に欲求してくる重たい頭で必死に準備をし終えた紗那の前で響いたのは、彼女を苛立たせる天才の悲鳴にも似た叫びだった。

「ああもう、煩い！」

「だ、だって、だって髪！せっかくの髪が！」

世界が騒いだ原因は、叫んだ言葉の通り紗那の髪にあった。昨日までは流れる美しい腰までの長さだったというのに、彼女の変わりようはかなりのものだ。

只のショートヘアならまだしも、今の髪型は明らかに男のもので驚きも倍増である。

ただし皮肉な事に、中性的な顔立ちが右の前髪だけわざとらしく長く残す形でウルフカットにしているその髪型により引き立ち、普通とは違った意味で似合っていた。

人の頭を指差して口をぱくぱくさせるなど、失礼にも程があるだろとぼやいてもこの時ばかりは世界に通用しなかった。

「もー、これから何が起こるか見当もつかないんだから、男として動いたほうが得策でしょうが。ってことで、準備してくれたよね？」

幸い、声も低くもなく高くもない。男としては少し高いかな、女としては少し低いかなという印象を人に抱かせる。本人も、まるでこうなるのが前提で産まれてきたみたいだとあまりの都合の良さに笑っていたところだ。

「あ、うん。」

そんな中、世界は淡く、紗那が準備する間に心変わりするのを期待していたのかもしれない。そんな様子がまったく見てとれ無い彼女に、悲しそうな顔をしていた。

紗那にとって、別れはする必要が無かった。

部屋に戻った時には朝になっていて、切り替えの為に用意したコーヒーと軽い朝食を手早く味わった後は、今まであまり手を付けずにいた両親からのお金やバイト代を注ぎ込み、街で必要な物を揃えるのに奔走した。

そして、学校に一方的に退学届けを押し付け、携帯を解約し、家にある自分の物を出来るだけ処分していく。手元に残ったお金は全て銀行からおろし、短い手紙と共にダイニングテーブルの上へ。

可能な限り地球に居た痕跡を消し去った後に残ったのは、ベッド等の粗大ゴミだけであった。

発つ鳥、後を濁さず。

そう言えば聞こえが良いが、紗那自身未練を断ち切りたかったのかもしれない。実際、長年すれ違い続けて色々な感情を抱いていた両親に対しては、『自業自得だよ』と捨てゼリフを贈っていた。

「ほら、さっさと昨日の場所に行くんじゃないの？デル。」

「デル？」

「言ったでしょ？あんたの名前、考えといてあげるって。」

一度、静かにリビングを見渡した紗那は、照れたように言った。デルフィニウムの花からとって、デル。美容室で髪を切ってもらっている最中読んでいた雑誌に花言葉が載っていて、これしかないなと決めた名だった。

きっかけを聞けばなんて安直な考え方だと思っただろうが、我ながらぴったりだと紗那は無い胸を張る。

「デル……デルフィニウム、かな？」

世界……デルも察したらしく、ここまで意地悪をしなくていいじゃないかと言いつつも嫌では無いのか、どこか嬉しそうにはにかんでいた。

名は、何よりも鎖となる。そこに込められる想いが大きければ、大きいほど。

「嫌味な名前だけど、まあいいさ。じゃ、行こうか。」

明けっぱなしのカーテンの先では、真っ赤な夕日が沈み始めていて、部屋をその色に染め上げる。逆光のせいで眩しく、目を細めながら差し出された手を取った紗那にとって、そこから見た景色が地球での最後となった。

彼女が持つて行ったものは、変装用のカツラやカラーコンタクト、そういったものだけで思い出の品は一切無い。この後、社会でどういった扱いを受けるにしろ、二度とコンクリートの地を踏むことは叶わないのだ。でも、それで良いと本人は心から思っている。

全てが終わった時、責められるのは紗那だけだろう。デルはおそらく、色々な者から優しく慰められる。

君は悪くない、そんな感じで。

「まっ、こんなもんか。」

「もっ、だめ、無理っ！過労、死、する〜！」

再び昨日と同じ部屋へと連れて来られた紗那は、あれこれとデルに指示を出して漸く出発できる状態になっていた。

アピスには黒髪、黒目は居ないらしく、まず、短く切った髪を違和感の無いシルバーに、瞳をゴールドに変えさせ、さらに用意させたあちらでの旅装束に着替える。それから、当然言語を理解し話せるようにと、読み書き言葉もチート上等と習得させた。

他にも執拗に細かい作業を頼んでいったが、それは追々説明していくとしよう。その結果が、今の状況である。

疲労困憊で床に伏せて青い顔をしているデルと、高鳴る気持ちを抑えきれずにテンションが上がりぎみの紗那。かなりの温度差だ。

脅して出してもらった姿見に映るのは、日本人の要素は欠片も残っていない目つきの悪い青年。クルリとその場で回転し、全身をチエツクする仕草は流石に女のものであるが、スタイルはそれにしては寂しく、身長をとつても170cmとかなり高いので不信な点はどこにもない。ついでを言えば、本人もびっくりの美青年だ。

どこかミステリアスで、エキサイティング。年上に好かれそうなタイプである。

「で、あんたは何時までダレてんの？」

「あれだけ酷使されたら、疲れて当然だよー!？」

あまりの理不尽さにデルが起き上がって訴えるも、今のテンション最高潮な紗那に勝てるわけがない。普段でも難しいが、それだけ叫べれば十分元気でしょと切られてしまう。

さらに、横暴だ悪魔だという文句を喚ばれるが、それは褒め言葉にしか思えず、紗那はシカトして最後の仕上げに取りかかった。

まず、黒い布とピアスが一体となっているマスク紛いのものを付けて目から下を隠し、加えて、さらに大きな布を特殊な巻き方、まるで素人とは思えない手つきで素早く髪からマスクの上、肩まで覆っ

ていく。  
すると、イメージとしてはアラビアのような、マントを靡かせる男が出来上がった。

晒されているのは金の瞳のみで、怪しさ満点である。

日本でこんな格好をして歩けば、即通報か職務質問されること間違い無しだ。

「うっわ、めちゃくちゃファンタジー……!!」

自分で作り上げたというのに、紗那は普段からは想像できない程にはしゃいで楽しそうにしていた。

ここまで徹底的に顔を隠すのは、当然これから先予想が付かない事ばかりが待ち受けているだろうからだ。デルに教えられた限り、文化も文明も、何もかもが常識外ばかり。出来る限り目立たず、悟られず、紗那は動いていかなければならない。

「で、私の名前は？」

「その質問を待ってたよ〜う!!」

全身の最終チエックを施しながら軽く聞いたことに、デルは馬鹿みたいに大げさに反応した。思わず眉を顰める紗那だったが、最早その表情を見た目で窺い知るのとは不可能であり、デルが気付くことは無かった。

「女の子の時はリサーナ。覚えやすいよう、紗那から考えましたん  
!」

嬉々として発表するデルであつたが可哀想に、紗那は今一の反応。あまりに安直で悪趣味だと彼女は思った。

しかし、それすら気付かないデルである。2人のテンションは、まったくの真逆に変わっていく。

「んで、男の子のはサイド！これはなんか、ピカツときて決めました〜。」

「うっわぁ……。」

紗那は心底デルに頼んだのを後悔した。さっきのリサーナもだが、それ以上にサイドとは。アニメの1話で死ぬ脇役感がムンムンで、どうにも不安に駆られたのだ。

流石に言葉まで呟かれたら気付いたのか、そんな紗那の反応がお気に召さず、デルはいじけて床に突っ伏した。気のせいじゃなく、嗚咽も聞こえてくる。

しかし、そこで申し訳無いとは思わないのが紗那だ。良い加減デルも覚えればいいものを、許せる範囲を超えてふざけるデルに苛立ち、そうすれば考える前に手が動く。

「ごめんなさい、もうふざけませんっ！」

まあ、ギリギリで身の危険を感じたデルが察知するのだが。殴りそこない舌打ちをする音には、気付かないフリをするのが得策なのだろう。

こうやって、一見緊張感など皆無なやり取りを続ける2人であったが、デルはずっと緊張が空回りしている状態で、紗那はそれを無視

する形で空気を保たせていた。しかし、それももう終わる。

事前にやるべき事はすべて済ませたのだ。後はもう、ただ突き進むだけ。

「実はね、もう一つ、用意してるんだ。」

「さすが、分かってるじゃん。」

2人はまったく正反対の笑みを交わし、どちらともなく抱き合っ。傍から見ればどうやっても怪しくはあるが、そんなことは見る者がいなければ関係無い。デルの身体は、小刻みに震えていた。

「……ルシエ。これから先、僕は君をそう呼ぶよ。」

か細い声で言われた言葉に、紗那は頷いた。

リサーナ。それは、紗那という地球にいた一人の少女の存在と記憶を留める戒めの名。

サイド。それは、地球にもアピスにも居場所がない、それでいてどちらにも属するという証明の名。

「デルも相当嫌味な奴だね。魔界の王ならまだしも、そんなところから取るなんて。」

「ルシエには負けるぞ。」

紗那も名に込められている意味が分かったのか、少し悔しそうにはかむ。

布に隠されて見えなくても視え、デルは受け取ってくれたことに喜びを感じた。

ルシエ。それは罪を示す名であり、存在を知らしめる名でもある。

「ま、私にぴったりだね。んじゃあ、せつかくだからそれにプラスしよっかな。」

どれも授かったばかりで、馴染むまでに時間がかかるだろう。それでも、リサーナは騙す際に何度も口にし、サイドは隠れたり奪ったりする際、この中で一番口にしていくだろう。

そして。

「破罪使、ルシエ。うん、これが一番ぴったりだ。」

その罪すらも壊す使い。破壊するだけじゃ飽きたらず、破壊そのものを呼びこむ使者。アピスの歴史に深く刻まれるであろう、新しい”彼女”の名。

「これまた、捻くれた字あなだねえ。」

つい先ほど贈られ初めて口にした名は、もう2度と会うことのないだろう人へと渡る。お互いの名だけが、恐らくこの出会いを絆へと変えてくれるはずだ。口にし、される度に。

「じゃあ、いつてらっしゃい。捻くれるのも程ほどにね?」

「さよなら、脆弱エゴイスト。まっ、私はしたいようにするだけだ

」。

何時だって別れとはあっさりとやってくる。

彼女の足元から黒い光が現れ、それが蛇のようにうねりながらその身体に巻き付き始めた。真っ白な場所で見える黒は毒々しく、そのまま身体は黒い空間へゆっくり引きずり込まれていく。しかし、彼女は焦らない。

2人はお互い静かに見つめ合い、自然と顔を引き寄せる。最初で最後の、布越しのキスだった。

布は、まるで鉄格子のように想いと熱を隔てる。

しかし、それでも2人は深く熱く、互いの罪を別け合い擦り合う。

彼女は、そのさらに下にひっそりと込められた想いだけを汲み取らずに、とんとと軽く相手の身体を押しした。

たったそれだけで、簡単にその距離は開けてしまった。

ラブとライクは、似ているようで決して交わらない重みの違う想いだ。

悲しいかな、それが2人の差であった。

「じゃ、暴れてきますか！」

名残惜しさを隠せずに儂い笑みを浮かべるデルに、彼女はマスクの下で笑顔を返し大きく手を振った。最後に、ある言葉を負わせながら。

そうして、地球に存在していた河内紗那という一人の少女の短い生涯が幕を閉じた。

「じゃあ、まずは一番楽な場所に飛ばすね？」

「ふざけんな、一番難易度高いところだろそこは！」

それが、2人が交わした最後の会話だった。

河内紗那が最後に世界に負わせた言葉。

それは、「絶対に、許さないから。」という、あまりにも残酷で切ない想いだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1238y/>

---

その背に黒の羽根を

2011年11月5日02時14分発行